



プラハの夜

3月24日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

3月24日のおはなし「プラハの夜」

深夜。突然よみがえってきた風景に私は息が詰まる。それは何でもない景色。子どもころの家の近所の情景。家からほんの少し離れたところに空き地があって、それは坂の上にある中学校の正門のすぐそばで、私はその正門からちょっと下ったところに立っている。立っているような感じであたりを見ている。

左手に空き地。右手には何だか見捨てられたような祠（ほこら）。暗くてじめじめして、こわいので私たちはそこを見ないようにしていたものだ。もうちょっと坂を下ると、右手に友達の家がある。同じ敷地に同級生が2人も住んでいた。その2人はいとも同士で、どちらも私の仲良しの友だちで、美咲ちゃんとは自転車で隣町まで走り回ったものだ。拓也くんは心密かに好きだったけど打ち明けたことはない。

私たちはしょっちゅう3人で一緒に遊んだ。目の前の空き地では近所の子どもたちみんなと遊んだ。そこからほど近い、小さな滝がある川は私たちのお気に入りの遊び場だったし、中学校の敷地の奥にある体育館にこっそり忍び込んだりもした。そして、2人の住んでいる家から地続きの大きなお屋敷は、私たち3人にとって特別な、誰にも教えない秘密の遊び場だった。

小学校3年生の夏休み。私たちはその秘密の遊び場につながる秘密の通路を見つけ出した。敷地の奥にある拓也くんの家の裏手。マサキを植えた生け垣に、その通路はぽっかりと開いていた。遠くから見たら全然わからない。でもその時、美咲ちゃんの投げたボールが見当違いの方に飛んでいって、ころころとその通路に転がり込んでしまったのだ。

私たちはそこをのぞきこんで、隣の家の庭にころがっているボールを見つめた。マサキの生け垣は上の方はびっしり埋まっているのに、なぜかボールが転がったところだけはすっぽりとトンネルのように開いていて、野良猫でも出入りするのかわいらしくきれいな足元もきれいな足元にならされている。トンネルの大きさは子どもならラクラクくぐり抜けられるくらいに見えた。

トンネルの向こうには太い木の根元が見えていて、ボールはその先の芝生の端で止まっていた。夏の日差しが照りつけて芝生は少し茶色にあせているところもあったけど、おおむね鮮やかな緑に輝いていた。私たちの緑色のボールは手前の、陽の当たらない木陰にひっそりころがっていた。

私はボールのことよりもその小さなトンネルの先に何があるのか知りたくてうずうずしていた。隣には大金持ちの外人さんが住んでいると聞いたことがあったが、実際に会ったことはなかったし、それが本当なのか、ただの噂なのかよくわからなかった。私たちは顔を見合わせた。一番不安そうな顔をしていたのは拓也くんだった。美咲ちゃんが迷ってないくせに「どうしよう」と

つぶやいてみせた。

「仕方ないね。ボール、入っちゃったんだもん」

そう言うとは私は、わざと明るい声を張り上げて「ボール取るのでお邪魔しまーす！」と叫んで穴の中に入っていた。くぐりながら、拓也くんパンツ見られたら嫌だなと思ったけど、そんなことよりトンネルの先に何かあるのか見たくてたまらなかった。

そこで私たちが何を見たのか。それは誰にも言わない約束になっている。3人だけの秘密。「誰かに言ったら針千本飲一ます」と誓い合った約束。だからいまも私はそこで見たもののことを話すことはできない。それが私たちの約束だから。でも、このことは言ってもいいだろう。それ以来、そこは私たちの秘密の花園になったのだと。翌年の春、圧倒的な景色を見てから私たちはそこを「桜の園」と命名した。小学生の私たちはあの有名な戯曲の存在は知らなかった。ただ見た通りに名前をつけたのだ。

いま私は、子供の頃に遊んだあの一角の光景を、あの日々をありありと思い出し、懐かしさに胸を押しつつぶされそうになっている。故郷を遠く離れたプラハのホテルの一室で。ノートブックパソコンのモニターを前にして私は身動きすることもできずにいる。モニターに映し出されているのは、明日会うことになっているアニメーターから送られてきたサンプル映像だ。

色鉛筆で書かれたようなタッチの手書きのアニメーション。描き出されているのは間違いなくあの家だ。あの、桜の園の家だ。そして何とすることだろう、私たちもそこにいる。子供時代の私たち3人も。その家の庭に髪黒い子どもたちが3人、サカキの生け垣の下にぽっかりあいた秘密の通路をってこっそり出入りしているところも描かれているのだ。

どうして？

どうしてあの家が？

どうして私たちが？

それも遥か昔の子供時代の。

ああそうか。それに違いない。

このアニメーターはあの家の住人なのだ。

それしか考えられない。

明日会うチェコ人のアニメーターは、あの家に住んでいた、隣の家の金持ちの外人さんの家族の一人に違いない。ノートブックのモニターに懐かしい風景が次々に浮かびあがる。わたしはほとんど悲鳴をあげそうになっている。この場から逃げ出したいと思っている。どうして？ どうして？ こんなに懐かしい景色なのに。やがて私は気づく。それはこのアニメーションのトーン

のせいだと。このストーリーはハッピーエンドにはならない。悲しい結末を迎える。それがわかるから恐ろしくて恐ろしくてたまらないのだ。

終盤、桜の樹は伐り倒され、芝生ははがされ、土が掘り返しされ、庭園も屋敷もみるみる姿を失っていく。重機でならされて、切り分けられて、やがてそこにそっくりな顔つきをした戸建て住宅がいくつも並んでいく。殺伐とした変化を色鉛筆のスケッチが優しく伝えてくれる。私は落ち着きを取り戻し、エンドクレジットを見つめている。そして最後に浮かびあがった言葉を読み取り、それを心の中で繰り返す。この人も、この場所のことを、そう呼んでいたんだと思いながら。

さよなら、私の『桜の園』。さよなら、私の『桜の園』。

(「さよなら、私の『桜の園』」 ordered by あとう ちえ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

プラハの夜

<http://p.booklog.jp/book/46700>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46700>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46700>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.